

# ウガンダの地で母親たちが書く家族の物語

## メモリーブックの文学活動とテキスト紹介

大池真知子

### メモリーブックとは

メモリーブックとは、HIV とともに生きる親（大半は母親）が、子どもに宛てて、家族や子ども自身について書く小冊子である。私的な冊子であり出版はされていない。書記文化が発達している民族は民族語で、未発達の場合は英語等で書く。親子のコミュニケーションを促し、感染を子に伝え、将来を計画するために書かれた。

書き手は、項目が印刷されたノートに書く。項目数は30程度で、「家族の物語」「親戚」「家族の行事」「あなた（宛先である子ども）が赤ちゃんのころ」「学校生活」「あなたの将来への私（書き手である親）の想い」「私の子ども時代」「職業」「健康」「余暇活動」「人生についての考え」「大切な友人」等である。

1991年にイギリスで、HIV とともに生きるアフリカ出身の親が、子どもに家族のことを伝えようと始めた。それがウガンダでワークショップとして整備され、1998年に最初に書かれた。その後、タンザニア、エチオピア、ジンバブエ等に広まった。1990年代後半～2000年代前半が最盛期で、ウガンダだけで数千冊書かれたと推定されるが、2000年代後半には、HIV 関連の資金が社会支援よりも医療支援に傾注されるようになり、下火になった。

通常はグループで書かかれる。ウガンダでは、PTC (Post-Test Club) が各地区で組織されている。PTC とは、HIV の検査を受けた人が、結果にかかわらず加入できるグループで、NGO は PTC を窓口にして、職業訓練、低利の貸し付け、コミュニティの支援活動などを行っていた。メモリーブックは「相続計画のワークショップ」として行われた。1～2週間で、メモリーブックだけでなく、子どもの権利、財産や相続についても学んだ。ワークショップ修了後、参加者は PTC の毎週の集会で教えあいながら執筆した。自分で書けない人は、親戚、カウンセラー、PTC メンバーなどに口述筆記をしてもらった。活動団体が執筆支援者を紹介することもあった。

### テキスト分析

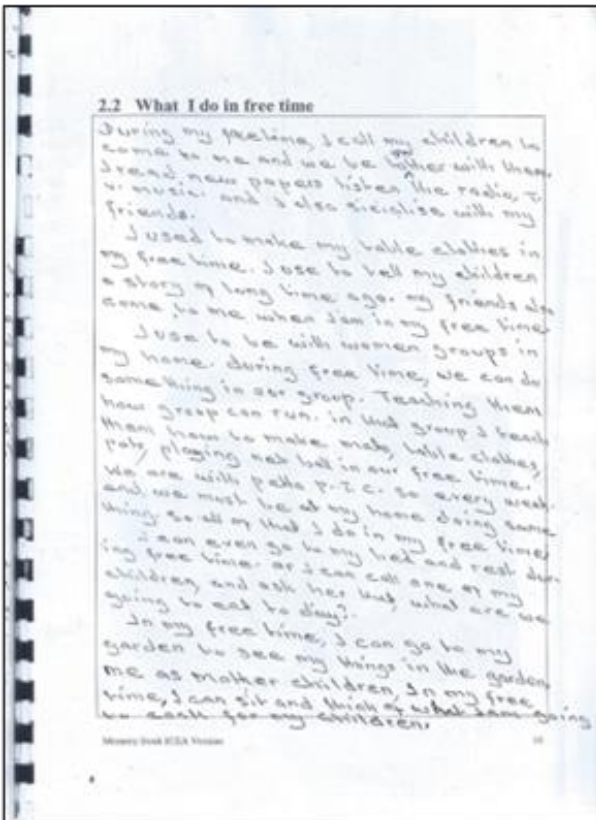
メモリーブックには、闘病記に典型的な「病む自己を克明に記す」ものもあるが例外的で、書き手はエイズについて別の形で記述していた。発表では特徴的な記述を①口承のリズムで書く②家族で書く③隙間やズレから書くとして紹介した。本稿では紙幅の都合により①のみ報告する。

フローレンスは1952年に生まれ、初等教育7年修了後、小規模農業を営んできた。1997年に夫がエイズで死去し、フローレンスも感染を知った。3冊のメモリーブックをすべて英語で書いている。2冊は自分で執筆し、3冊目は親戚が代理筆記した。文章の特徴は、繰り返し、呼びかけ、連想といった口承の技法を使って、村の暮らしや人々の支えあいを美しく表現していることである。

たとえば「What I do in my Free Time」で挙げられている行動は、一家団欒、手芸、友人との交際の3つに分けることができる。書記文化に親しんだ書き手なら、3つを段落ごとに列挙しそれぞれ説明するだろう。しかしフローレンスは、暇な場面を具体的に思い描いて、場面ごとにどう過ごすかを書く。その結果、同様の行動が繰り返して描写される。同時に「in my free time」を繰り返してリズムを刻む。こうして、代わり映えはしなくとも、穏やかで豊かな日常生活を送っている様子を浮かび上がらせる

フローレンスは、小学校卒業程度の書き手としては例外的に詳細なメモリーブックを書いている。彼女は歴史記述について2冊目の「WACHI MAMAKERE GI PECHO MAWAN [家族の物語]」で語っている。

Any way A\*\*\*, me as your mam, to day I want to tell you history of our family back ground. Before I go on with my story, let me ask you. What is history? And why do we learn about history? O.K. we learn history to shows what man has done, what man is, what we can do for the society which is good. We learn history when we want to creat feeling of the getherness [togetherness] to show that we are one people.



その後彼女は 1 段落目で、両親から聞いた家族の話を語り始める。ここで彼女は、親から子へ歴史を継承する語りの行為そのものに言及する（イタリック箇所）。

*My dear son, I want you to sit down and read this memory book very well. Our family back ground was like this. We are Japathola by tribe. By clan we are B\*\*\* clan. When my father married my mam as his wife, they staded [stayed] for 16 year without getting any child in thier life. That how they told us when we grow up or when we can unstand [understand] something. When saw that, she can not get any child, she tried to tell our father to marry another wife. Then our father asked our mam that why do you send me to marry another wife? Our mam said to him that I do not want you to be without any child. This is how our parents told us. And I also want you to know how our family back ground goes. Father also married another wife. Do you know what happened to our mother? Within two years our mam got a baby girl who is our first born. And that baby girl was named C\*\*\* [meaning “blessing from God”] because our mother has stayed for so many years without getting a child. Then second born was a boy, who is called D\*\*\*. Me here as your mother, I was the third born. (italics mine)*

なおフローレンスは、1 冊目の「Special Events」では、父方の歴史を 1855 年から 1993 年までたどっている。子どもの曾祖父が今の土地に定住してから、子どもの末のきょうだいがそこで生まれるまでの歴史である。

このように、家族の歴史を生き生きと語るフローレンスだが、自分のエイズについてはたどたどしい。「My health status」の項目の一部を引用する

Then my children advised me to go and test my blood. In 1998 May 26 it was on Tuesday, I test my blood and they told me to come back for the result on the 28th May. On that very day it was when I received my result that I was positive and I was sent to Taso Tororo [HIV 関連団体] on that same year or on that very day. On that year Taso was still within Tororo hospital.

My first counsellor was called Stephen. They went on treating me in Taso in those years, until Taso was transfered where it is now.

[After transference] They went again with their treating me up to 2001. There [in the new location] my counsellor was called Tereza. And it was when we were distributed with food up to now with Taso Tororo.

In 2001 I was transfered to C.D.C. Tororo [HIV 関連団体] and on that year we were given Septrin [対処療法の薬] and kolorin [浄水の薬剤] together with a jericane for water.

In 2003 I was tested with C.D.C. Tororo and my askaris [CD4 免疫値] wrere only 184. So I was very weak. I started my ARVs up to now. CDC Tororo tested me on the 10th-9-2003. Then they told me to go back for the result on the 17th-9-2003. And I started this ARVs on the 17th-10-2003.

Good lack Plan [国際 NGO] also stated helping as with food in this year. Those who are in ARVs and I'm very glad to see that, I am one of them. I thanks God for that. And here we got a lot of food. So my son, I will be still with you in this world.

I am very sorry for this my son. I was given a number to CDC Trororo which is 19\*\*\*. In 2002 in September when I joined a P.T.C (Post Test Club) so now we are aided by Plan Tororo and we are supported food, cooking oil and all equipments.

5 段落目までフローレンスは、年月日、場所、医療処置を詳しく記録する。衰弱した身体で、HIV 関連機関に通い、検査、治療、カウンセリングを繰り返した経験は、エイズの本質的な部分だったのだろう。記述が整理されず、表現はこわばり、フローレンスの緊張感が伝わる。その一方で、不安や恐怖を内側から表現しない。

一方、6 段落目以降は支援について書き、いわゆるサバイバーナラティブに近づけて、項目を終えている。それまでのこわばりは解かれ、息子に語りかけはじめ、フローレンスのいつもの語り口が戻る。

結論すれば、エイズの苦しみ自体は十分記述されていない。フローレンスは、多くの項目で家族や友人との生活を生き生きと語っているが、エイズの苦しみについては検査や治療の事実を記録するにとどまっている。フローレンスにとって過去を記述するのは「つながりを創造し、私たちが一体であることを示」すためだった。闘病記にありがちな、個人の懊悩に向きあうという内向きかつ負のベクトルは、それとは相容れないのだろう。

ただし、フローレンスは、言語化し向きあうのとは別の方法で病いの苦悩に対処している。教会で祈り、家族と団欒し、仲間と集うことによって。それがメモリーブックの構成にも表れている。つまり、エイズについて My health status の項目になんとか記述して、その項目を他の項目で囲む。それによってエイズを囲いこみ、エイズとともに生きる。このようにして彼女はエイズとともに生きている。それが彼女たちの生き方なのである。

参考文献

Oike Machiko. “Literary Analysis of a Memory Book by a Schoolteacher with HIV in Rural Uganda: Writing about Living with and Dying of HIV.” *African Studies Review*, 66.1 (2023): 45-73. DOI:10.1017/asr.2022.147



